

連絡船 結城文

『紙霊』より

大三島盛港午後四時
フェリーに滑り込み
広島県の忠海港へ
甲板に立ち
十一月終わりの風のなか
傾きかけた日をまぶしみながら
海をゆく

青緑色のおだやかな内海
進んでゆく船のまわり
白い布を拡げたように
泡の膜ができては消える
浮遊物のなにもない
きれいな海

やさしく入り組んだ島山
藍色の濃淡の山稜の
幾重ものかさなり
単調な波音のくり返しは
次元の違う時間へ運ぶ

戦前高円寺に住んでいた頃
夏になると
祖母の郷里の伊予松山へ
毎年のようにいった
カンナの花とひるがえっていた白いカーテン
はじめて水に浮かぶことを覚えた
梅津寺（ばいしんじ）の海
もっと西へゆけば
あの海につながる

神戸から松山まで

船で眠りしながらいったこともあった

帰りの連絡船のなか

弟が発熱し神戸で緊急入院

幼いながら

叔母と二人

心もとなく

東京へ帰った

母はきつと弟に付ききりだったのだ

思い出のなか

どこをさがしても

母の姿はない

空襲警報に怯えながら渡った

宇高連絡船

学童疎開の子らをのせた

「紫雲丸」遭難事件

この海のどこかに

彼らは今も眠っている

船べりによれば

青緑の水に

いくつもの水泡が

とりとめもなく

白い布のように

拡がってがっては消え

また膜となる